敦賀市立東浦中学校　保護者の皆様へ

令和６年度　全国学力・学習状況調査結果分析と今後の対策

本年４月１８日に、「全国学力・学習状況調査」が全国一斉に実施されました。本校の３年生の各教科の正答率については、県平均や全国平均を上回る結果でした。しかし、いくつかの課題も明らかになりました。各教科の結果分析と今後の対策を以下のようにまとめましたのでお知らせします。

国語科

【良 好】
・話し合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめること。
・目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。

【課 題】	【対 策】
説明的文章の読解において、「思考・判断・表現」問題の正答率が低いです。 ①文章と図とを結びつけ、その関係をふまえて内容を理解する問題。 ②目的に応じて必要な情報に着目して、要約する問題。	・図表や写真を含む説明的文章を取り上げ、図表が文章のどの部分と関連しているか、筆者の表現の意図は何か等、説明する活動を継続し、充実させます。 ・新聞記事やインターネット記事を使い、内容を要約して伝え合う活動を取り入れ、必要な情報を正確に捉える力の向上を目指します。

【課題】①の設問

2　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一口に植物といっても、世の中には多種多様なものがあります。木でも草でもよいのですが、そのなかから好きなものを片端から思い浮かべて、それぞれの葉の形を一言で表してみてください。どのような言葉があがってくるでしょうか。

「楕円形(だえんけい)の」「薄い」「先のとがった」「平べったい」「丸い」「細かく裂けた」「細長い」「ギザギザのある」「厚ぼったい」「針のような」「手のひらのような」……。それこそさまざまな形容があるでしょう（図）。

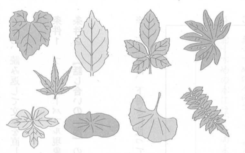


図　さまざまな形の葉

では次に、それらの言葉を2つのグループに分けるとしたら、どのように分けられるでしょうか。もちろん、言葉を2つのグループに分けるやり方はいろいろあるので、何が正解、ということはありません。自由に考えてみてください。

今、①問題となっているのは「形」ですから、二次元的（平面的）な形容と、三次元的な（厚み方向の）形容に分けることはできそうです。つまり、②先ほど挙げた例であれば、「楕円形の」「先のとがった」「丸い」「細かく裂けた」「細長い」「ギザギザのある」「針のような」「手のひらのような」は平面の形の形容で、「薄い」「平べったい」「厚ぼったい」は厚み方向の形容です。

こうして見ると、平面的な形容のほうは数も多くてバラエティーに富んでいるのに対して、厚み方向の形容は、きわめて限定されている感じです。しかも、「薄い」と「厚ぼったい」という正反対の言葉が入っているのが気になります。

しかし、考えてみると、誰も「サイコロが厚ぼったい」とは言いません。「厚ぼったい」も「薄い」も、平たい物質の形容であって、その形の本質は「平たい」ことにあるわけです。平たいもののなかには、平均的なものより厚めなもの、薄めなものがあって、その程度の差が形容の差を生み出しているのでしょう。

つまり、植物の葉の、三次元的な厚み方向の形の本質は「平たい」というひとつの共通の概念にまとめることができます。これはどう考えたらよいのでしょうか。

といった途端、③ネギの葉はどうなんだ、という突っ込み(注1)が入りました。たしかに長ネギの葉は丸くなっています。八百屋さんから長ネギを買ってきてよく観察すると、白い部分は何層にもなっていて中まで詰まっているので、実際の立体的な形は円柱です。しかし、緑色の部分はほぼ一層で、中は空っぽですから、実際の形は円筒形です。葉(注2)としての役割を果たす緑色の部分は、外側一層しかなくて、丸く湾曲しているものの、ネギも平たいといえるでしょう。やはり、三次元的な形は「平たい」という一言に集約できそうです。(注3)

一　「図　さまざまな形の葉」の本文中での役割を説明したものとして適切なものを、次の1から4までの中から二つ選びなさい。

1　実際の葉の形をたくさん思い浮かべることができるように補助する役割。
2　実際の葉の形とそれを表す言葉とを結び付けて捉えられるようにする役割。
3　葉の形を表す言葉を二つのグループに分けるやり方が複数あることを示す役割。
4　葉の形を表す言葉の中では厚み方向の形容が限定的であることの根拠を示す役割。

【課題】②の設問

四　本文に書かれていることを理解するために、着目する内容を決めて要約します。次のア、イから一つ選んで（どちらを選んでもかまいません。）要約しなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

ア　筆者が、葉の形を表す言葉をどのようなグループに分け、各グループにどのような特徴があると述べているかについて。
イ　筆者が、数学や物理学などと生物学とでは、学問としてどのような違いがあると述べているかについて。

※　左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

〈着目する内容〉　㋐　㋑　←選んだ〈着目する内容〉を塗りつぶしなさい。

数学科

【良 好】
「知識・技能」を問う問題の正答率が高いです。
・等式を目的に応じて変形することができるかどうかをみる問題
・問題場面における考察の対象を明確に捉え、正の数と負の数の加法の計算ができるかどうかをみる問題
・複数の集団のデータの分布から、四分位範囲を比較することができるかどうかをみる問題

【課 題】
「思考・判断・表現」を問う問題の正答率が低いです。
①目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる問題
②複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる問題

【対 策】
次のような取組を充実させ、思考力・判断力・表現力の向上を目指していきます。
①文字を用いた式のよさを実感できるように、偶数や奇数、〇の倍数、連続する３つの整数等の表し方や、説明の仕方の手順を確認します。
②データの活用に関する学習用語や、複数のデータを扱った際の判断のポイントになる代表値を根拠にした説明の仕方を確認します。

【課題①】の設問

（２）次の図は、千夏さんと優真さんが考えてかいたものです。

図３

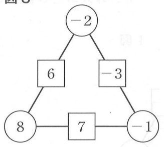
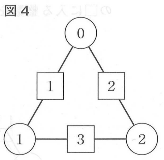


図４



千夏さんは、図２、図３、図４を見ながら、○に入れた整数の和と□に入る整数の和の間に何か関係があるのではないかと考え、次のように調べてみました。

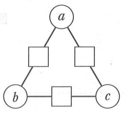
調べたこと

	○に入れた整数の和	□に入る整数の和
図２	1 ＋3＋ 6 ＝10	4＋9＋ 7 ＝20
図３	(−2)＋8＋(−1)＝ 5	6＋7＋(−3)＝10
図４	0 ＋1＋ 2 ＝ 3	1＋3＋ 2 ＝ 6

前ページの調べたことから、20＝2×10、10＝2×5、6＝2×3のように、「□に入る整数の和は、○に入れた整数の和の２倍になる」と予想することができます。この予想が成り立つことを説明します。下の説明を完成しなさい。

説明

○に入れた整数を a、b、c とすると、
３つの□に入る整数は、
$a+b$、$b+c$、$c+a$ と表される。
それらの和は、

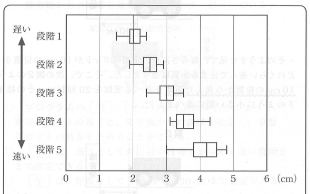


$(a+b)+(b+c)+(c+a)$
＝

【課題】②の設問

（２）咲希さんは、車型ロボットの速さを変えたときに、10 cm の位置から進んだ距離がどうなるか調べることにしました。そこで、速さを段階１から段階５まで変えて、10 cm の位置から進んだ距離をそれぞれ20回ずつ調べ、データを集めました。そして、データの分布の傾向を比較するために箱ひげ図に表しました。

10 cm の位置から進んだ距離の分布



	10 cm の位置から進んだ距離(cm)				
	最小値	第１四分位数	中央値	第３四分位数	最大値
段階１	1.5	1.9	2.0	2.2	2.4
段階２	1.9	2.3	2.5	2.7	2.9
段階３	2.4	2.8	3.0	3.2	3.5
段階４	3.1	3.3	3.5	3.8	4.3
段階５	3.0	3.8	4.2	4.5	4.8

前ページの10 cm の位置から進んだ距離の分布から、「速さが段階１から段階５まで、だんだん速くなるにつれて、10 cm の位置から進んだ距離が長くなる傾向にある」と主張することができます。そのように主張することができる理由を、10 cm の位置から進んだ距離の分布の５つの箱ひげ図を比較して説明します。下の説明を完成しなさい。

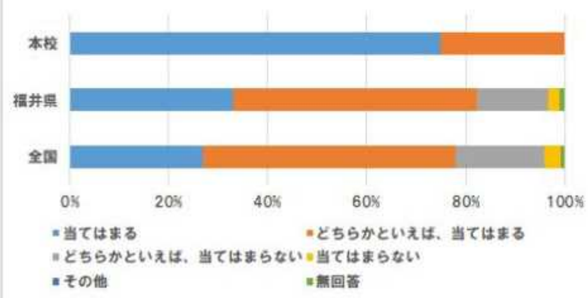
説明

したがって、速さが段階１から段階５まで、だんだん速くなるにつれて、10 cm の位置から進んだ距離が長くなる傾向にある。

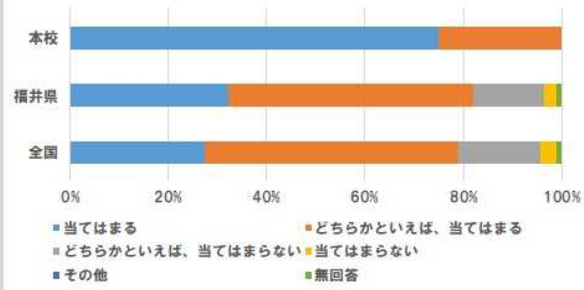
生徒質問紙

【良　好】

学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか



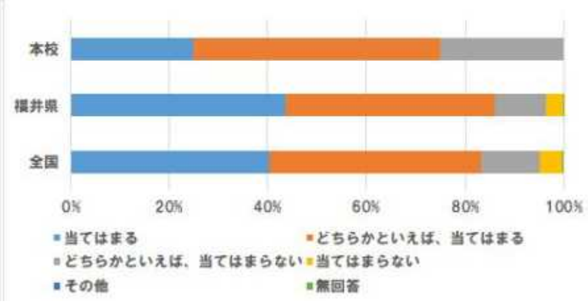
授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。



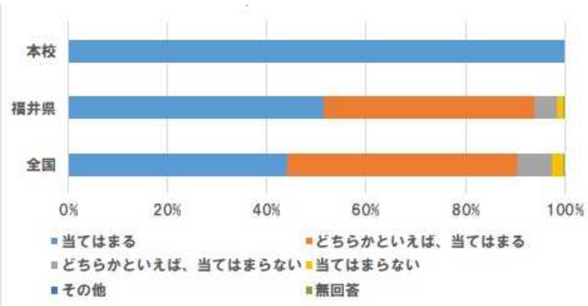
学習したことを生かしたり、次の学びにつなげていくことができていると感じている生徒がほとんどであるという結果になりました。今後も、自分から課題を見つけることや、進んで探究的な学習に取り組む姿勢などをさらに伸ばしていき、自ら学ぶ生徒の育成に努めていきたいと思います。

【課　題】

自分には、よいところがあると思いますか。



先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか



「自分にはよいところがあるか」という質問には、否定的な回答の割合が多く、「先生が認めてくれているか」という質問には全員が肯定的な回答をしているという矛盾が見られました。原因として、小規模校であるために、校内では認められる場面が多くあるものの、同世代から自分が認められる経験が少なく、自分に自信が持てないことが考えられます。

校内で取り組んでいるリアクションタイムや、子どもたちが主役となって取り組む学校行事などを通して、互いを認め合う活動をさらに充実させると共に、学校外での活動や他校との交流などの方法も模索していきたいと思います。

生徒質問紙では、ほとんどの質問項目で、県や全国と比較して、肯定的な回答の割合が高いという良好な結果が得られました。

これからも、家庭・地域・学校の連携を大切にしながら、一人一人の生徒の健やかな成長のために学校全体で取り組んでいきます。

今後とも、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。